

ビルマでの戦い (00・02・17)

古 山 高麗雄 (昭17・9文丙)

はじめに

古山高麗雄です。旧知の方が多いのですが、始めての方も多少いらっしゃるので、簡単に自己紹介をします。昭和一五年に村尾君、中江君、大川君、野平君なんかのクラス、文丙に入りましたが、一年間で退学届を出して辞めました。それで、僕はみんなにませているませていると言われるけれども、それはセックスのことだけではなくて、ものの考え方が、支那事変にどうしても我慢がでなかつたからです。僕は朝鮮新義州という旧植民地の小さな街で育ちましたが、新義州という街は一種の国際都市で、朝鮮人、中国人、白系ロシア人なんかと一緒につき合っていたからか、日本の欺瞞が見えて見えて、一種の反抗児になったのです。三高に入って、東大、京大に行けば、日本でリーダーになります。エリートコースのなかでも、一高・三高というのは特にエリートコースで、そこに入ったの

は僕は偉くなりたかつたからです。しかし、支那事変に反対して日本で偉くなるということは、どういうことか分らなくなつて、バランスを失つちやつたのです。二十位はたちで未だ若いですから、バランスのと리카たが分らない。だから、とち狂つてしまひまして、ただただ放蕩したのです。宮川町へ行つたり、祇園の乙部おつぶへ行つたり、勉強もせずにそういうところばかり行つていた。三高の成績は村尾君が一番だつたらしいけれど、僕はそんなことで一学期が逆トツ、二学期がブービー、ピリから二番、三学期も逆トツでした。自分の心の中でもバランスを失うし、こんな劣等生でひどい学生はいないなんて言われた。担任だつたフランス文学の伊吹武彦先生に、どうしようかと相談に行つたら、あなたみたいなのはお辞めになつた方がいいのじゃあないですか、と言われたのです。そう言えばそうだな、そうすればすつきりするなと思ひ、それで一年間で辞めたのです。ところが、辞めるとどん底です、親からは勘当になりますし、それで東京へ戻つて、今でいえばヒツピーみたいな生活をしていたのですが、そのうちに召集令状が来まして軍隊に入りました。召集令状から逃れることはできません。仙台の歩兵第四連隊に入隊したのですが、何の間違ひですか、幹部候補生要員として、招集されていたのです。僕は幹部候補生になる資格はないと思いますが、と言つたら、いやある、第三高等学校に教練の合格の証明書を手紙でもらえというから、落第していると思うのだけどと言つて、手紙を出したらやっぱり落第

しておりました。このとおりですから幹部候補生になる資格はありませんと言うと、旧制中学を出ていればあるから受けなくてはいかんと言うのです。それで三〇人受けたうち五人落ちたのですが、僕は勿論落ちました。三高でも教練の試験のときは白紙で出しましたけれど、軍隊でも幹部候補生の試験は白紙を出しましたから、落ちるのは当然で、それで一緒に入った連中はみんな予備士官学校に入って、将校の道を歩いたのですが、僕は万年一等兵です。陸軍というところは入隊して三か月事故さえ起きなかつたら、二等兵が一等兵になるのです。その後が上がらないのです、駄目な兵隊は。僕はずっと戦争が終るまで陸軍一等兵でしたが、幹部候補生の試験に落第したあと、お前戦地に行くかと言われて、行きます、と答えました。それでは師団司令部に転属にしてやるから、そしたら戦地に行けるからといわれて、転属になりました。

小説家への道

僕の入った第二師団は、ガダルカナルで壊滅した部隊で、ガダルカナルでやられた生残りがフィリピンに戻って来て、師団司令部はカバナツワン、第四連隊はゴンザレスと、いろいろ分れて駐屯して建て直しをしていたのです。そこで人間の数だけ補充し、一応数だけ揃えて、シンガポール、クアラルンプール、ビルマへ行つたのです。当時、北ビルマか

ら雲南省の方はずっと、九州の部隊が守っておりましたけれど、昭和一九年に連合軍の大反攻が始って危なくなつたので、第二師団はベンガル湾の方、大体九州ぐらゐの広さにひろがって警備についていたのですが、それを全部集めて助つ人部隊として、中国雲南省に派遣されたのです。

僕は雲南で敵の砲弾を浴びまして、こんなひどい目に遭うより死んだ方が楽だと思ひました。しかし、死ぬのは怖いのです。自傷兵といひまして、自分で自分をけがして後に下がつて生き延びた兵隊がいたといひますが、こういうことは実際にはなかなかできないのです。軍医がみれば自分で自分を撃つたか、敵に撃たれたかは煙硝の付き具合で直ぐに分りますから、自分で自分の手足を撃つたような奴は、元来なら軍法会議にかけるのですが、そんな手間暇をかける余裕はありませんから、絶対生きて帰れないといふところへ飛ばされてしまうのです。上官が戦死といふ名の死刑にするわけです。自分で自分を撃つなんてそんな怖いことはできないけれど、敵の弾に当るのだったら大歓迎だと、死は怖くても僕はそう思ひました。それにもう一つは、あんまり苦しいときにはどうやればいいのかということになると、あほなことを考えるか、ものを茶化して笑うかしかないのだと、僕は思ひました。それを通り越した苦しさというのもありますけれど、まあ或る段階までは自分で自分を茶化しながら、お前は馬鹿であほだと自分で言ひ聞かせて、人のやらないお

かしたことを一人でやるという、マスターベーションのようなものですけれども、そういう紛らし方もあるのです。それで僕はこんなひどいところにいるよりはびっこになって、後方に下げてもらおうかなと思って、穴の中で逆立ちして足を空中にさらして、当れ当れなんて言っていた。これは当りません。

穴を掘るのがつらい。日本軍の穴はたこつぼと言いまして、縦長の壕を深く掘るのですが、行く先、行く先で深い穴を掘られますと疲労困憊して体は動かなくなりますから、古山式棺桶型壕というのを、僕は発明しまして、浅く、そこで横たわったら体が全部すぽとかくれる長方形の壕を掘りました。これはたこつぼよりずっと掘りやすい。しかし、そこに寝ていると、雨が降って、お風呂みたいになっちゃいます、西洋風呂だと言って我慢していました。たこつぼに入っていると五右衛門風呂ですけれども、おれは西洋風呂に入っているよと周りのものに言ったりして、自分を茶化し茶化ししていた。行軍というのは辛いから、始めはワルツでツンダッタ、ツンダッタと勢いよく歩くけれども、直ぐにくたびれて来る。そしたらタンゴの足取りで歩けばいいのだ、タンゴはクイック、クイック、スロー、スローでよろよろよろよろしますから、そんな歌を、みんなが軍歌を歌っているとき、自分だけクンパルシータかなんかを口ずさんで歩いたりしました。これをしぶといと言われますが、僕としてみれば、一種の何というか自分を茶化して苦しみから逃れる

方法だったのです。だけど、そんな兵隊というの聞いたことないと言われます。僕はそんな戦争経験をしたのですが、結局弾も当らず生還しました。

南方に行った兵隊の七割五分ぐらいは栄養失調で死んだのではないかと思われまます。でいます。いわゆる餓死ですね。食べ物無く、内臓が弱って、マラリアになってまます内臓が弱って、これで行倒れみたいな形で死んだ人間が大体七割五分、戦死者の大体七割五分は栄養失調で死んだのですよ。僕も死の一步手前までは行きました。アフリカの子供みたいに肋骨が飛出しまして、足が腫れ上がりまして、一日歩いて、何百メートルかしか歩けないこともありましたけれど、それでも生きて帰ってきたのですから、よほど悪運が強いのでしょね。

そういう経験があるものですから、よく古山君は私小説作家なのか、戦争小説作家なのか、紹介するときどう言えがいいのだ、なんて言われます。僕は何と言われたってかまわない。僕は戦争の長編小説を書くのは、僕の仕事の一つの大きなレパートリーにはしていませんけれど、何か自分を試してみたくなりまして、自分が時代小説を書いたらどの程度のものが書けるかしら、ポルノ小説書いたらどの程度のものがかけるかしらと、エンターテインメントなんて書けないのだろうかなんて、ちょっとやってみるのです。大抵失敗しますけれど、それでふざけて誰も興奮しない古山ポルノというキャッチフレーズで売って

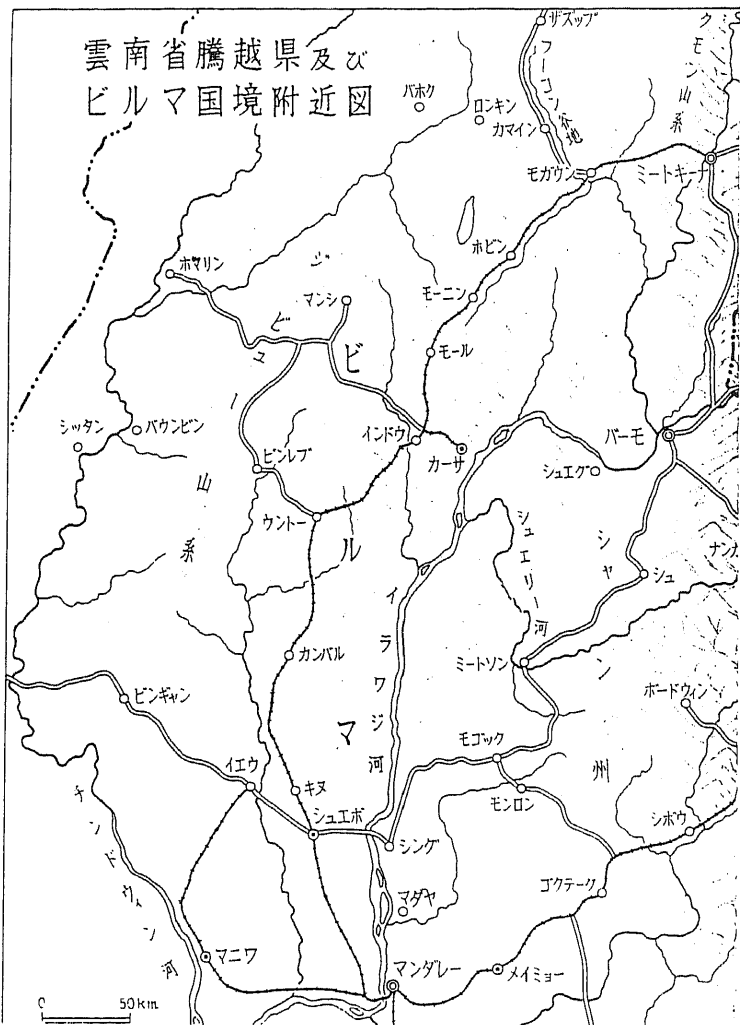
れないかなんて、冗談ばかり言っています。僕は大体私小説的な書き方で書いている。それから、戦争に関して一兵卒の立場から言いたいことを言う、という作家がおりませんので、そのあたりにちよつと希少価値があるかもしれません。

ビルマと雲南

皆さんも戦争をよくご存知だと思いますが、日本のジャーナリズムというのが、戦争を新聞や映画で語るとき、ガダルカナルのことはよく語るけれども、ニューギニアのことは語りません。ニューギニアも殆ど八割九割の兵隊が死んでおりますけれど、ニューギニアのことは日本のジャーナリズムは少ししか伝えない。ビルマの話にしても、インパールのことは六万人の兵隊が死んでいますから、しかも飢餓街道だなんて言ってみんな行倒れで死んでますから、戦争というのはこんなに悲惨なんだ、悲惨なんだということ言う、格好の作戦ですから、そればかり語られます。ところが北ビルマや雲南の戦場の話はあんまり紹介されていないのです。インパール作戦というのは天王山だ、天王山だとジャーナリズムだけの当時の軍部が騒ぎましたけれども、古山一等兵に言わせれば、あれは負けるに決まっている戦いなのです。勝てるわけなのです。天王山ではありません。

それから後ではつきり分ったことですけれども、イギリス、インド、支那、アメリカの

連合軍は、あんなもの適当にあしらっていけば、日本は自滅すると最初から言っていたのです。向うは北ビルマから雲南を主戦場と考えていた。ところが日本は北ビルマ、雲南省の方に敵の兵力を引きつけておけば、インパールが攻めやすくなるかと考えたのです。向うは日本の補給力では自滅するから、適当にあしらって置いてこつちをやろうと考えていた。こういう作戦を廻り行灯作戦あんどんと違って、お互いに主戦場を別のところを考えているわけです。日本は向うの思うつぼの通りになりまして、それで壊滅するのですが、戦死者はインパールが一番多かつたけれども、作戦としての主戦場、重要だった戦場、戦況が紹介されない、それで雲南やフーコン地区の戦闘を紹介したい気持も僕のなかにありました。中国雲南省は九州の兵団という第五六師団が防衛していました。最初所謂電撃作戦で、日本はビルマ攻略というのをやります。これは当初大本営の作戦構想のなかにはなかったのですが、シンガポールを取ったら調子にのって、ビルマまで進出しようということになって、ビルマに大軍を派遣するわけです。そのときの日本は強いのです。それは連合軍の準備が整っていなかったからかもしれないませんが、日本軍は一か月から一か月半位で、ビルマ全土を占領してしまう、それでうぬぼれてしまったのがいけなかったのです。それでますます弾が無くたって兵隊が少なくなっても、いわゆる大和魂で勝てるというような妄想を描いたのではないのでしょうか。それともあれは、妄想というより曳かれ者の小唄のよう



なものだったのでしょうか。

ビルマの戦場は、北はインド国境の近くまで、東の方は中国の怒江どこうという河があります。雲南省に怒山どきんという山があって、そこから流れてきて、ビルマへ入るとサルウィン河と名前が違って、マルタバン湾に注ぐ河がありますが、その怒江の線まで攻め込むのです。その後、日本軍は要所要所に守備隊を作って守るわけです。ところが、連合軍はビルマで最初やられますけれども、やられた一か月後から反攻の戦略を綿密に立てて準備するをのです。日本軍は勝った勝ったでいい気になっていたときに、向うはずっとそれに準備をしていて、どれだけの準備をして、どれだけの兵力を使って、どうすれば勝てるかという作戦を、蒋介石、アメリカ、イギリスの合同で練って、昭和一九年の五月には雲南を取返しに来ます。それで、僕なんかひどい目に遭うのですけれども、どうも日本の陸軍大学を出た方々は何を考えていたのか、本当に陸軍一等兵でもこんな馬鹿な思うようなことを、やれやれと言うのです。あの人達はは語学なんかはできたかもしれませんが。ナポレオンがどんな戦争をしたかということをしやべらせたら、色々勉強していて細かいことまで講義ができるかもしれません。だが、とても戦争のプロとは思えないことを平気で言っていて、ビルマには三二万の大軍を送って、そのうち六割何分死んでおります。一九万何千人か。守備隊が一つ一つ全滅します。あの人達は玉碎しろとは言わないのです。玉碎とは負けること

ですから。死守しろというのです。同じことです。守っているものにしてみれば、とにかく退却するなということですから。フーコン地区でも死守しろ、死守しろという命令が次から次に出て、どうしても守りきれなくなると、今度は脱出しろという。この脱出というのが大変なのです。負け戦というのは勝ち戦に比べるとうんとつらいのです。そういう実状が殆ど伝わっていないのではないか。

ビルマ戦線三部作

僕は戦記を書くとしたのではありません。戦記ということになりますと、これは防衛庁資料室に膨大な資料があります。誤りも多いし、書いた人が元参謀だからだからそういった人達に都合のいい書き方になっていきますけれども、一個人がいくら頑張つて書いてみても、あれだけのものは書けません。戦争の全体を伝えるということでは、資料的にとてまかないません。僕は小説家ですから、いい小説を書かなければいけない、ということが頭にありまして、小説としてあの戦争を書いています。今はもう南方で戦地経験をした作家が日本にいなくなりまして、作品の出来ばえはともかく、希少価値が出てきたので頑張らなければいけないという自意識もあります。そして二〇年がかりで古山の戦争長編小説三部作というものにかかりまして、やっと去年、家内が死んだ直後に、第三部の「フーコ

ン戦記」を完成しました。それで、僕の仕事の一つが終ったような気がしております。

ビルマという国は、人間の顔を横から見たような、能登半島のような形をしておりまして、広さが日本全土の大体一・八倍あります。北と西にインドとの国境があり、東側に中国との国境があつて、少し下がつて来ますと、ラオスとの国境になります。そこからもうちょっと南の方に来ると、タイとの国境があつて、その辺がいわゆる阿片の採れる魔の三角地帯と言われる地域になります。古山一等兵はビルマへ入りまして、始めはベンガル湾のあたりで警備につくのですが、先ほど言いましたように雲南が危なくなつたというので、その助っ人部隊でラングーンを通つてマンダレーというところまで行きます。マンダレーから鉄道が二股に分れて出ておりまして、左の方に行きますとフーコンという谷地のある入口の辺りにあるミートキナという街に達する、いわゆるミートキナ線という鉄道があります。もう一つ東の方に行きますと、ラシオという街がありましてそこまで鉄道が行つています。どちらもそこから先は鉄道はありません。中国雲南省に入りますと騰越とうえつという街があつて、龍陵りゅうりやうという街があつて、それから、と拉孟らちやういうこれは街ではありません、単に山のなかに作つた陣地です。そういうところに守備隊を置いた。中国軍が反攻して来て先ず拉孟が全滅する、拉孟の守備隊兵は一六〇〇名位いたのですが、そのうち捕虜になつて帰つてきたのが三〇名いるいるかないか、騰越とうえつというところでは二六〇〇人の守備隊が

いたのですが、これもまた三〇名か四〇名捕虜になった者だけが生きて帰って来ました。あとは全部死んだのです。

僕は最初「断作戦」というのを書きました。これは久留米の歩兵連隊が膽越で全滅するのですが、捕虜になって生きて帰った人に取材して書きました。そしたら、古山君は東北の部隊なのに九州の部隊ばかり書いて、東北の部隊だって同じ所で戦ったのだから、東北の部隊のことも書いてくれと言われたのです。それで第二部の「龍陵会戦」を書きました。僕が行ったのは龍陵という街で、そこは九州の部隊の工兵隊と会津若松の工兵連隊が一緒になって守備隊を作っていました。会津若松の連隊の話と僕自身の戦争経験とを合わせてこれを書きました。自分のことが半分書いてありまして私小説でもありません。

あの頃は第何連隊だの第何師団とは言いませんで、防諜語と云うのですか、通称語と云うのですか、防諜のためだといって各部隊に勇いさむとか、菊きくとか、龍たつとか、壮さうとか、烈れつとかいろいろそういう名称が付いているのです。第五六師団は龍兵団と言います。この第五六師団の龍兵団の話だけ書いて、同じ久留米の兄弟師団、第一八師団の菊兵団が、フーコンと云うところで惨憺たるめにあっているのにそれを書いてくれないと云うのは、不公平だという声が第一八師団の方から出ましたので、それでは「断作戦」、「龍陵会戦」、「フーコン戦記」の三つを合わせて、三部作にすることにしました。第一部の「断作戦」を書き始め

て第三部の「フーコン戦記」が出るまで一九年間かかりました。

「フーコン戦記」を書くために大村まで四回くらい行つて話を聞きました。僕は雲南省では戦闘を経験しましたが、北ビルマでは戦つておりませんので、書いていても、こつちの思い過しで間違つたことを書いているのではないかと不安なのです。

フーコンとはカチン語で死の谷という意味です。しかし、谷と言いましても木曾の御嶽山の谷のように、山が両側から迫つて来ているのではないのです。直線距離で南北が一六〇キロから一八〇キロ、左右が広いところで七〇キロから八〇キロ、狭いところで二〇キロ、ここ東京駅から厚木までが大体三〇キロですから、谷と言うより盆地と言つた方がいい、そんな広い谷なのです。そして周りは、インドとの境にはクツカイ山系、そこから少し南の方に行きますとワンタク山系という山脈があり、中国方面にはクモン山系という山脈があつて、それに囲まれています。平地は中程で狭くなり再び広がつて、砂時計を横から見たような形をしていて、狭まつたところをジャンプキンタン、そこから北を北フーコン、南を南フーコンと言います。話を聞いてみますと、それはすごいところで、猛獣は出る、もろもろのばい菌だらけ。猿の大群が木から木へ飛ぶ、野象はいる、いやなのは吸血やまびるです。マツチの軸位の山びるが、五月ぐらいから出て来ます。それは草にも付いてるし、木の葉や枝にも付いていて襲ってくる。やまびるは人間の息に感応するとかで、

人間が来ると一斉にそっちの方を向いてマツチの軸みたいなのが、おいでおいでをしているように体を揺らし、そして飛びついて来るのです。木の枝に触ったり何かするとそこからも移りますし、ゲートルの隙間からも入ってくる、ボタンの穴からも入ってくる、靴のはどめの穴からも入ってくる、そして人間の血を吸いますと、親指位の太さになるのです。これが体中にぶら下がるのです。それを下手にはぎますと噛みつかれたところから血が流れ出て、出血多量で死んだりするのです。だから煙草の火かなんかで丹念に殺さなければいけない。ところがその煙草がない。ひるは取付く、しかもひるは柔らかいところが好きらしくて、脇の下だとか、またくらだとか、そういうところを狙うのです。そうすると子持のちんぽができたなんて言っつて。そんなところで戦争をしたのです。そうしてみんなのたれ死にしたのです。

けれども、食べ物にはビルマ戦線の方がまだガダルカナルよりはありました。それでも最後には一日一人の割当てが、五勺から七勺位になります。米が手に入らなくて一週間も二週間も食わずに歩いたという兵隊も沢山おられますけれども、ガダルカナルはもつとひどかったです。ガダルカナルでは、日本軍の糧秣を担いでいる日本兵を、日本兵が襲って奪ったりしています。フーコンでは、弱った体では野生の鶏を捕まえることは至難の技ですが、野鶏はいるし、水牛を見付けて殺して、その水牛の肉を食うとか、まだ幾らか、食い物はあ

りました。大体おかずは何食ってたと聞いてみたら、ニンニクです。ニンニクが配給になるのだそうです。ニンニクをもらってそれをかじって飯を食うのです。明けても暮れてもニンニク。僕はおかずが無いときに鷹の爪という唐辛子をかじって、口がぱつと熱くなる。それを消すためにご飯をほおりこんで食った経験がありました。

鮫だと思えますけれども、干し魚の一切れをおかずにしたたり、ご飯に塩だけかけたり、そういうこともあったそうですが、米が一日五勺から七勺しか無かったらお粥しか作れません。雨が降るところでマッチが点かない、煙を立てたら撃たれるというようなどころでお粥を作るのは大変でした。ジャングルには食べられる野草が若干ありますので、ビルマしゅんぎくなんて名前を付けてまして、それを粥に入れて量を増やして食ったりしていたのです。

どんどんどんどん押されて来ます。菊軍団の兵隊は七か月もったの、八か月もったのと言ってそれを誇りにしていますけれども、七か月もったということは、七か月ひどい目に遭ったということです。しかし、北フーコンでは、四か月くらい持ちましたか、けれども、圧倒的な敵を迎え撃って、押されて南フーコンに退くと、もう戦闘などというものではありません。如何に敵の包囲の中を逃げるかです。逃げてフーコンから脱出しても、敵の空挺部隊などが待ち受けていて決して安全ではない、そういう戦場でした。

河に橋があるわけではない、だから泳ぎの出来る人が電線に向う岸に渡して、それに天幕で荷物を入れる箱船を作つて渡しておいて、体だけで向うに渡ろうとしたのですが、途中で軍帽だけ残して死んで行つたりする、そんな敗走をしたのです。もう通れる道が無い、敵は東からも西からも兎に角包囲作戦、日本軍の逃げる退路を断ちますから、それを突破しなければなりません。工兵隊がジャングルの中に伐開路ばつかいろうという即席の道を作ります。そんな道ですからどろどろ道で、膝近くまで足がもぐります。フーコンの南端に追いつめられた日本軍は、最後に伐開路を通つてフーコンから脱出しようとしみます。その道を九州の部隊の人は筑紫峠と言う名前を付けて歩くのですが、その坂道が上れない。のたれ死にするものあり、自殺する者ありで悲惨を極めます。とどこどこに小屋がありまして、その小屋へ行つて寝てみたら、両側ともウジ虫だらけの死体で、そのウジ虫が寝ているうちに自分の上にはい上がつて来るといふ、そういう悲惨な脱出路だったのです。その脱出路を師団長も通つたのですが、通る前に下士官が掃除に来た。よたよたして死にかけている兵士に、「閣下が通る間は、お前はその辺に隠れていろ」と言い、死骸やなんかは道端に押しやつて、その上に枯枝やなんかをかけて、閣下の目に触れないようにしたのです。師団長だけは立派な軍服を着ていて、参謀は少し汚れていました。

そういうような話を、嘘を書いてはいけなから、手記を読んだり話を聞いたりするた

めに大村まで何回も足を運んだのですが、書き終えた後でも何か不安になって、本当かな、本当かなと思ってまた聞きに行ったりしました。けれども、それは本当なのです。そういう戦争だったのです。

人間万事「運」

僕はそれを平和のために書くなどというのではなくて、ただ現実にあつた事実を書いたつもりです。こんなに悲惨だった、こんなに悲惨だったと強調せずに、何とか修飾語を少なくして、書きとめておきたいという気持もありました。小説としての出来ばえの評価は読者にまかせるより仕方がないのですけれども、自分としては大変張合いのある仕事でした。やっとこの三部作が完成しまして、村尾君がそれを祝ってくれて、今日僕に喋れと言って引張り出してくれたのです。第三高等学校には僕のような作家もいるということを知って頂きたいと思います。

三高は本当にいい学校でした。周りを見渡すと優秀な方ばかりで、教えられて随分勉強になりました。そういう意味では、僕ははつきり言って、やりたいことをやっているだけで、才能は大してありません。いろいろ夢は持ちますけれど、やってみると気持ばかりで、才能が足りない自分というものを自覚しては、オレはここまでかな、ここまでかなと思ひ

ながら、生きて来ています。けれども、こうやってものを書いていきますと、知らない方と知合いになれたりして、何か恵まれているような感じがします。戦争に行つて死ななかつたこと自体恵まれておりますが、家庭的にはあんまり恵まれておりません。僕は家を外にしたい放題のことにしまして来ましたが、これは当然の報いです。昨年の秋に家内が心筋梗塞で亡くなり老いたるやもめになりました。しかも死ぬまでには何とか完成するよ、と言つて出版社と約束していた本も完成しましたので、何か全てが終つたような気がします。けれども、何とこののですか、人間というのは運です。もと新潮社の亀井龍夫君が「人生運不運」というエッセーを書けと言つてくれていたこともあり、あともう一寸何か書いて、それから死のうと思つていきますので宜しくお願いいたします。

そう言えば、僕は大正九年生まれですが、大正九年に生まれたことも運、親父が東北人だったことも運、それから男に生れたことも運。強制連行、強制連行と、さも悪いことのように言いますけれど、それは悪いことに違ひはないけれど、我々全部強制連行だったのではないか、徴兵制というのは強制連行ですから、何も従軍慰安婦だけが強制連行ではない、我々日本人は全部、国家総動員という名の強制連行だった。おれはビルマはいやだ、ジャワへ行きたいと言つたつて、ジャワへ行かしてもらえないものではない、召集令状に反抗したら監獄へ放り込まれて、これは脱税やなんかよりずっと厳しいですから、そこか

らは逃れられない。人生には流れのようなものがある、ただその流れの中で、自分で選択しなければならぬ分れ道に時々ぶつかります。

後で取消になりますけれど、大学に入ったら二年間だけ徴兵猶予できることになっていました。二年までは浪人してもいいのだと言って、僕は二年目に三高の文科と慶応大学の医学部と受けて両方通って、さあ親父は医者だし、医者にならなきゃあいかんかなという気持ちも多少あったものですから、朝鮮新義州で開業している親父に電報を打ちました。どっちへ行こうかと言って。そしたら好きな方に行けという返事が来たので、それじゃあおれ三高に行くと言って三高に行った。あれなんか、ある大きな流れのなかの選択でしたが、あれも運。おかげで、皆さんともお知合いになれたし、得難い戦争経験もさせて頂かし、あのと慶応に行ったら今頃どうなったか、こういったことは答の出ることではありませんけれども、とにかく、あれも運、これも運だと思っています。

戦後、僕は軍隊から解放されて社会に戻りましたが、そこでもまたうだつが上がりませんでした。しかし、身から出た錆です、僕は会社人間として駄目なんだから当然のことなのですが、これも運だと言えるかもしれません。会社の選択というのも運といえば運かもしれない。自分で選択しなければならぬケースというのはそういうときに生まれます。こちの会社へ行くか、あちの会社へ行くか、それで自分の運命は変ってしまいます。こ

んな選択もふくめて人は大きな運の流れの中にいるのとも言えるかもしれませんが、戦争なんかに行ってひどいめに遭うとこういう考え方をするようになるのでしょうか。僕は天は自ら助くるものを助くというのは嘘だ、人には運しかないという感じがします。体に三〇もの破片が入っていても生きている者は生きています。爪の先ぐらいの弾が心臓の一つ当れば死ぬ。運も実力のうちなんてそんなことはない。運の悪い者はそれで終りなんだし、いい者は何とか恵まれて生きています。そういうニヒリスティックな気持ちにもなります。けれども、これからの戦争というのは今までと違ってミサイルだの、飛行機が無いと、或は原爆が無いと、戦争になりません。これからは、地域戦争のようなものは日本国内ではありませんが、外の国では民族闘争などというようなのがありまして、悲惨なことが起きています。日本がこういう国であるということも国の運であり、僕達の運でもある。ただ日本に戦争が無いからと言って、脳天気であると、頭の発達が遅れます。

日本の嘗ての植民地政策なんていうのは、あれで良かったのかどうなのか、中江君なんかいろいろな教えてもらいたいと思うけれど、今からでも考えてみた方がいいのです。僕は、朝鮮で朝鮮人に名前を変えさせたり、日本語の使用を強要して朝鮮語を使わせないようにはしたり、ああいったことはやってはいけなかったことだと思えます。あなた方は古い文化を持っているのだから自分の先祖代々の名前を大事にしなさいよ、先祖代々の言葉を

大事にしなさいよ、と言って付き合わなければいけないかと思ひます。日本人はやたらに威張つた。あれもいけません。もちろん、そうでない人もいましたが、そういうことは反省しなければいけないのではないかと思ひます。

国策のために一生懸命になつた方を否定する気持はありませんが、人は間違いながら、その間違いに気付いたり、気付かなかたりしながら、そして、そういう互いを許容しながら、生きていけばいいのだと僕は思っています。三高はそういう考え方にピツタリの学校だつたと思ひます。そんな学校を早めに退学したことをしまつたなと今は思ひます。しかし、早めに退学してしまつても、三高に行つて良かったと思ひます。なんかまとまりのつかない話をしてしまいました。